

創造への出発

——毛沢東(四)——

中屋敷

宏

問題の所在

秋収蜂起から井岡山への撤退までの毛沢東の行動に対する、現在の中国での一般的評価は次のようなものである。「毛沢東同志はこの起義闘争実践の中で、自党的にマルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の実践を結合して、一步一步と中国の国情に適合した農村で都市を包囲し、武装して政権を奪取するという革命の道を探求した⁽¹⁾」。このような評価は毛沢東の中国革命の勝利の出発点が、秋収蜂起にあることを指摘している点では正確であるが、その具体的内容が明らかでないというのが欠点である。この評価のポイントは「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の実践」の「結合」という事にあるが、その内容が全く明らかでないのである。なぜ毛沢東がこのような創造的行為を行なったのか、という問題になると全く追求されていない。

党史研究に掲載されている賀春禧の論文は、毛沢東の創造の内容を具体的に論じている点で問題を一步進めている。彼は毛沢東は「中央の秋収起義における指導思想と政策主張に対して、多くの正確なマルクス主義的突破と発展をなし、党の思想理論の発展のために重要な貢献をした」と言い、毛沢東のした「マルクス主義的突破と発展」の内容を六点にわたってあげている。⁽²⁾この論文は中共中央の「指導思想と政策主張」に対する「マルクス主義的突破と発展」をなした所に、毛沢東の意味を認めている点が問題を一步前進させている。しかし、いかなる「指導思想と政策主張」

に対する、いかなる「突破と発展」であつたのか、毛沢東がこのような創造的行為をなした立場と思想とはいかなる内容のものであつたか、このような問題は殆んど考えられず、放置されたままになっている。

このような問題になると、コミンテルン運動に対する毛沢東の革命運動の独自性と継承性という問題を正面に据えねばならないが、現在の中国ではこの視角はあまり明らかではない。現在の共産党支配という情況が、コミンテルン運動の影を引きずっており、その点を意識化し難いという事情があると考えられる。しかし、秋収蜂起から井岡山への撤退という毛沢東の一連の行動は、コミンテルン支配の革命運動からの、相対的な意味での自立の過程だと考えねばならぬものである。毛沢東が批判し、決裂した「指導思想と政策主張」とは、コミンテルンのそれであり、彼の「突破と発展」とは、コミンテルン運動の支配と呪縛からの自立、自己の革命運動の創造への出発であつたのである。

本章はこのような観点から、毛沢東がコミンテルン指導の運動との対立が顕在化し、決裂していく過程を分析しつつ、この両者の対立と決裂の根底にある、思想方法論、運動論の異質性を説明する事を目的とする。毛沢東は明らかにコミンテルンのそれとは異質な運動論を持ちつつ、それまでコミンテルン運動の枠内で活動してきたが、この一連の事件によって、両者の異質性は決裂にまで高まつたのである。この決裂にまでに立到つた両者の異質性の本体とは何なのか、これが本章で考えようとする問題である。しかし、毛沢東はコミンテルン運動と格闘する中で、自らも長年その中で活動してきたという事と相まって、自らが克服しようとした、その当の対象から大きく影響を受けざるをえなかつた。毛沢東自身、コミンテルン運動のいかなる部分を継承したのであろうか。これも本章で考えようとする第二の問題である。

このような問題は一言で言えば、毛沢東主義の運動の出発点の解明と言うことができる。このような作業は、その後の中国革命、更には文化大革命を理解するための基礎作業という意味を持つと考えられるのである。

第一節 コミンテルン運動の新展開

(一) コミンテルン運動の体質と左傾路線

コミンテルン運動とはマルクス・レーニン主義思想に基づく、資本主義体制の打倒を目標とする世界的規模での革命運動であったが、この運動には二つの立脚点があった。一つは資本主義体制に対する批判である。革命運動とは、もともと旧来の社会が持つ矛盾に対する憤激から発するものであるが、コミンテルン運動は資本主義社会が露呈した、あまりにも大きな貧富の格差、世界大戦にまで行きついた市場獲得競争、帝国主義世界分割競争、このような資本主義体制の矛盾に対する徹底した、非妥協的な批判から出発したものであった。この批判には現実的基礎があり、世の不正を告発する社会正義の立場があった。コミンテルン運動の人々の心に烈しく訴えかけ、人々の心を魅惑する力を持つていた理由である。コミンテルン運動の持つ精神的権威の源泉は、まさにここにあった。

コミンテルン運動のもう一つの立脚点は、言うまでもない事であるが、マルクス・レーニン主義の世界観である。マルクス主義は資本主義社会の矛盾は、社会主義革命を引起こし、それは社会主義社会——共産主義社会へと展開していく、それこそが「歴史的必然」であると説く。この世界観を「絶対的真理」だと確信すること、これがコミンテルン運動のもう一つの支柱であった。この世界観によると、現存の資本主義社会は、その内包する矛盾によって「必然的」に、社会主義社会へと展開していくのである。従って資本主義体制との闘争は、同時に社会主義という新社会創造の運動でもあった。

だがこの世界観は、あくまでも一つの世界観にしか過ぎず、現実の歴史の中で実証されたわけではなかった。マル

クス主義は「科学的真理」だと自称するが、しかし決して自然科学で言うような「科学的真理」ではなく、一つの世界観、イデオロギーにしか過ぎなかった。従つてこの組織体の社会主義社会創造のための運動とは、自らはその依拠する理論によつてその「現実性」を深く信じているが、実際はマルクス・レーニン主義という思想に基づく一つの「イデオロギー運動」にしかすぎなかつた。

そしてこのマルクス・レーニン主義という世界観に基づく、「イデオロギー運動」であるという事実が、この運動の性格と体質を深く規定したのであつた。まず第一にあげねばならないのは、この運動のイデオロギー運動としての避け難い性格としての「観念性」である。ここではマルクス・レーニン主義という一つの仮説的理論が、歴史および現実と殆ど同一視され、理論と合致するかどうか、「真理」の基準とされるので、運動の政治路線や政策が、現実から避難していくという傾向性を持つたのである。現状分析という非常に現実的な作業すら、それを行う「立場」が問われ、理論的正統性が問題とされた。このような思考が、現状分析をすら理論的立場を反復する観念的性質のものとする傾向を持つたのである。そしてイデオロギー運動としての宿命である「理論闘争」が、この観念的傾向を増幅するように作用した。コミンテルン運動内部での論戦は、ついにはスコラ哲学の論戦を彷彿させるものへと墮していったのである。このような事をくり返せばくり返す程、運動は現実社会から遊離していった。現実社会を変革するために「有効な」行動を行うべき運動体が、現実社会に働きかけける力を失い、独善的で観念的な運動体へ変貌していったのである。

またコミンテルン運動の組織的体質も、その信奉するイデオロギーの性格によつて、厳密に規定されたものであつた。対外、対内の両面にわたる権威主義的体質がそれである。マルクス・レーニン主義とは、一元的「歴史的必然」を説く歴史理論である。この歴史理論に依れば、コミンテルン運動こそが、「歴史的必然」の法則を體現した唯一の「正

しい「運動」であり、同時に人類解放という最高の理想の担い手であるということになる。この自己意識が対外的には、自己絶対化という権威主義を結果する。他の運動や組織に対する絶対的否定と排除という、コミンテルン運動の態度を決定するのである。事実コミンテルン運動は、統一戦線戦術を採用するまでは、自己以外のあらゆる社会運動の正当性を否定していた。特に自己のイデオロギーと近い所にある社会民主主義運動に対しては、徹底して否定と敵対の態度をとったのであった。この種のコミンテルン運動の自己絶対化の態度こそは、一元的歴史観であるマルクス主義の直接的な結果であつた。

またこの一元的歴史観が対内的に作用する時、それは救い難い、硬直した権威主義を生んだ。自らの運動が「歴史的必然」の法則を體現した唯一の「正しい」運動であるとすれば、その「正しさ」は、この運動体の指導部、或いは指導者に代表されている、ということになる。あらゆる運動は、指導者によつて指導されるという宿命から逃れられないものであるとするならば、このような思考はその論理的帰結である。となるとその指導者は、常に「正しい」、或いは絶対に「誤る」ことはない、ということになる。この論理はコミンテルン運動の歴史の中に貫徹していて、この運動は指導者の「無謬の神話」を生みだしていくのである。そしてそれはついには「絶対」に「誤る」ことのない指導者に対する、「絶対」な「個人崇拜」へと帰結していくのである。

「個人崇拜」を生みだした組織の実状が、運動が掲げる「人類解放」の理想といかにほど遠いものであつたかは、ここに詳述する必要はないであろう。そこは一種の人間精神にとつては「死」の世界であつた。人間の義務は、ただ絶対に「正しい」指導者の命令に服従することのみへと、矮小化されていったのである。そして「指導者」は、その「無謬の神話」を維持するために、その施策や行動を硬直化させていった。そしてやむなく絶対に「正しい」はずの政治路線や政策を変更しなければならぬ時には、自己の権威維持のために、様々な詐術をこらした。「無謬の神話」の世界

は、同時に虚偽と詐術、道徳的頽度と精神的腐敗によつて維持されたものであったのである。

コミンテルン運動とは、高い理想と使命感に鼓舞された運動であり、そしてこの運動の資本主義体制に対する告発には、人間的正義が体现されていた。そこにこの運動の生命はあつた。しかし、この運動が人間的正義と理想主義を基礎にして、マルクス主義運動として組織された時、それは資本主義社会とは別の意味での、不正義と虚偽、欺瞞、そして圧倒的な抑圧的権威主義の組織体へと変貌したのである。このコミンテルン運動の組織体としての性格は、その目的とする現実社会の変革＝革命に対して、決して有効に作用するものではなかつた。というよりも、この目的の達成に大いなるブレイキとして働くという性質のものであつた。その政治路線は原則的ではあつたが、現実の運動に対する「有効性」を欠いた、観念的性格のものが多かつた。そしてそれを実行する体制は、絶対服従を要求する権威主義的なものであつた。政治路線や政策の観念的性格が明らかになつて、現実的に変更が求められている場合にも、指導者の個人的権威とそれが一体としてあるため、それを変更する事は絶望的に困難であつた。いかに失敗が明らかであり、現実的犠牲が大きくとも、政策は強行された。そして失敗の責任は、他人に転嫁された。

第一次国共合作における中国の革命運動は、このようなコミンテルン運動の持つ政策的、組織的に硬直して体質の欠陥が、最も顕著に現れた時期であつた。国共両党の党内合作という方式の矛盾は、蔣介石のクーデター以後、誰の目にも明らかになりつつあつた。しかしコミンテルンはその政策の変更を許さなかつた。この現実離れした独善的な政策は、ソ連党内におけるスターリン派とトロツキー派との党内闘争もからんで、スターリンの政治的権威と一体のものとしてあつたからである。そしてこの観念的政策の破局が明らかになつた時にも、コミンテルンは何の有効な政策も提起できなかつた。コミンテルンの指導下にある限り、中国革命は敗北を運命づけられていた、と言つても過言ではない。中国人民は真に自己の解放を勝ちとるためには、帝国主義の支配と旧中国の支配体制を打倒するとともに、

「解放者」として現れている、コミンテルンの革命運動の支配という現実からも、自己を解放する事が必要であったのである。コミンテルンの革命運動の支配という事実は、中国民衆の自己解放の熱望に共感し、それを支援するという形をとりつつ、その実多大な犠牲を強要しつつ、それを破滅へ導くものであるから、それだけに悪質なものであるとも言えた。コミンテルン運動からの自立という課題は、真の人間の解放を求める中国の革命運動には、大きな課題として存在していたのである。

毛沢東のこの時代におけるコミンテルン運動に対する認識は、決して透徹したものではなかった。コミンテルン運動の持つ政策の観念性と運動体質の硬直性に対して、毛沢東は殆ど認識はなかったと言ってもよい。毛沢東はこの時代、全くコミンテルンに対する批判的態度を明らかにしていない。むしろ忠実にその運動の枠内で行動しているのである。しかしその後の毛沢東は、コミンテルンの指導からの「自立」という、中国革命運動が最も必要としている課題の解決に向けた行動をとるのであるが、この行動に到るまでには、毛沢東はその後、いくつかの経験を経ることが必要であったのである。

中国共産党指導者陳独秀は、最初から党内合作方式による「国共合作」には反対であったが、相つゞ国民党の弾圧に直面して、何度もコミンテルンに国共合作の破棄を要求する。¹¹⁾しかしこの度毎のコミンテルンの回答は、陳独秀の要求の拒否、国共合作の維持の指令であった。このコミンテルンの指令の結果こそは、あの恐るべき蒋介石軍による、無辜の大衆の大虐殺であった。第一次国共合作は、この血の海の中で、みじめに終焉したのである。にもかかわらず、コミンテルン指導者スターリンは、尚も「国共合作」に固執しつつ、他方では土地革命と農民の武装化という全く矛盾する政策を提起するのである。一九二七年七月のコミンテルン執行委員会は「中国革命当面の情勢に関する決議」

の中で、初めて土地革命の展開、労農の武装をとりあげるし、スターリン自身は二七年五月に有名な電報を中共中央に送り、土地革命と武装の問題を提起する。この電報は次のような内容のものであった。

農民革命がなければ、勝利することはできない。農民革命がなければ、国民党中央委員会は、信頼できない将軍たちのあわれなおもちゃに変わってしまうであろう。ゆきすぎとは闘わなければならない。しかしそれは、軍隊の助けをかりることなく、農民協会を通じて行わなければならない。……

国民党中央委員会の一部の旧指導者は、現在起っている事態を恐れている。彼らは動揺し妥協しつつある。農民と労働者階級の多数の新しい指導者は、下から国民党中央委員会にひき入れられなければならない。彼らの大胆な声は、古い指導者にもっと決意をもたせるか、もしくは彼らをふりすててしまふであろう。……

信頼できない将軍にたいする依存をすぐに一掃する必要がある。二万の共産黨員と湖南、湖北の五万の革命的労働者と農民を動員して、新しい兵団を編成し、軍事指揮官のための学校の学生を利用して、手おくれにならないうちに、自分の信頼できる軍隊を組織せよ。……これは困難な仕事であるが、それ以外に方法はない。³⁾

この電報が中共中央の政治局会議の席上読みあげられた時、会議に参加していた人は誰もが、「泣くに泣けず、笑うに笑えないという気持ちになり、一致してこれは実行できないと思った」⁴⁾と張国燾は書いているが、当然であろう。

この電報とは、これまでの失敗を糊塗し、尚かつ自己の「無謬」を証明するための方針転換という、およそ革命の課題解決とはほど遠い所で発想されたものであったからである。そのため依然として国民党に対する工作を指示しつつ、他方では軍隊の組織を命ずるといふ、到底実行できそうもない矛盾した指令を發するという事になったのである。この電報の意味は、これまでのコミンテルンの失敗を繕いつつ、コミンテルンとスターリンの政治的權威を守る事のみになった。だがしかし、このような偽瞞に満ちた指令であっても、全く行詰り状態にあった中国革命にとっては、

一つの救いであった。国民党軍の弾圧に対して、忍従に忍従を重ねてきた中共党指導部とその指導下にある大衆に、反撃の方針をしめすものであったからである。

武装闘争への転換は、疑いもなく中共党に歓呼をもって迎えられる。そしてこのコミンテルンの新方針に依拠して形成された新路線こそは、「左傾路線」と後に呼ばれるようになる、瞿秋下指導下の中共党の新しい政治路線であった。それはコミンテルンと中共党の、中国革命に対する新しい政策展開であった。この新路線こそは、毛沢東に新しい革命運動の創造に向わせる、決定的契機となるのである。

(二) 左傾路線の心情と論理

コミンテルンは中国政策を転換するに当って、一つの詐術を弄している。中国共産党総書記陳独秀をスケープゴートとして、これまでの中国革命における責任のすべてを彼に転嫁し、真の失敗の責任者であるスターリンとコミンテルンの政治的権威を護るといふ、既にソ連共産党の常套的手段となっている、あの欺瞞的手法を中国でも実行したのである。この方針転換のために開かれたのが一九二七年八月七日に開催された、あの有名な「八七緊急会議」である。この会議は出席者不足のため正式の中央委員会としては成立せず、そのため「緊急会議」とされているが、出席者は中央委員一二名、候補委員三名、青年団中央委員五名、地方代表二名である。この時コミンテルンを代表として出席したのがロミナーゼであり、会議はこのロミナーゼの報告を中心にして進められている。

コミンテルン代表ロミナーゼは、中共党指導部は「コミンテルンの指導と大衆の要求」から「遠く離れた」ものとなっており、それは既に「改良主義」となり、「反動的小資産階級」に対して「大きな譲歩」を行った結果、「我々の党の独立性」を喪失するまでに到っていると厳しく断罪する⁽¹⁾。そしてこのように中共党指導部が誤った原因をコミン

テルンの指令を大衆に伝達しなかったことにある、として次のように言う。「コミンテルンは一日として中国の党の路線を正規のものに引戻そうと考えなかった日はない。過去の最大の誤りは、中央がコミンテルンの指導を大衆の中へ伝達しなかった事である」。そしてコミンテルンの「正しき」を強調して次のように続ける。「コミンテルンも勿論時には誤る。しかし我々はそれが多くの闘争の経験を持つて信じている。我々は誠実にその指令を受けとらねばならない。そうでなければ必然的に失敗するであろう」。そして最後にはすべての責任が陳独秀へと転嫁される。「中央の指導者独秀同志は多くの問題がある。決議を経た後でも彼は個人の意思でこの決議を変更した。しかしこの責任は政治局全員が負うべきである」⁽²⁾。

中国革命の悲劇の眞の責任の所在を隠蔽したまま、コミンテルンの指令を忠実に実行してきたその当の人間に責任のすべてを転嫁するという破廉恥きわまりない手法である。だがこのような政治的雰囲気の中でも、人間の良心や理性が全く死んでしまっていたわけではない。当時の中共党の内部には、コミンテルンに対する不信や疑問が渦をまいていた。それは大会における蔡和森の「我々は現在依然としてコミンテルンも誤りがあると言うことはできない。その責任は政治局が負うべきである。そうでなければ自己の誤りを飾ることになる」⁽³⁾という発言からもうかがうことができる。張国燾はその回想に、陳独秀にすべての責任を転嫁するという筋書きは瞿秋白がポロティンと相談して作りあげたもので、自分は最後までこれに反対し、コミンテルンの責任を明かにするよう主張した、党内にも「コミンテルンは中国の情況を知らない」という声があつたと書いている⁽⁴⁾。中国党内も簡単には詐術に服従したわけではないのである。

しかし最終的にはコミンテルンの権威は圧倒的であつた。張国燾は同じ文章で瞿秋白の意図はコミンテルンの威信喪失は、今後の世界革命に大きな影響を及ぼすので、そういう事態を避けるためのものであつたと書いている。コミ

ンテルンの権威喪失は中共党内にも混乱をもたらすので、そういう事態は避けねばならぬという配慮も働いたであろう。しかし何と言つてもコミンテルンの方針転換は、中共党とその運動を救うものであった。だから中共党は歓迎してそれを受け入れたのである。李立三は一九三〇年に、次のように述べている。「当時の党の崩壊状態は非常に深刻で、もしこの時々八七“会議がなかったならば、党の崩壊はこの程度ではすまなかった。八七“会議は政治上党に新しい出路を与えたし、組織上党に新しい生命を与えた」⁽⁵⁾。当時は一時期六万人いた黨員が一万前後に、二百万人いた労働組員が三万人余りに減少し、かつては一千万人の協会員を誇った農民協会は、大部分が瓦解しているという状態になった。⁽⁶⁾このような党組織と大衆運動の崩壊を救うためには、「八七会議」の方向転換は、確かに時宜を得たものであったのである。

このような運動上の必要だけでなく、この方針転換が、当時の中共黨員達の鬱屈した心情に應えるものであった事も見逃してはならない。李維漢は当時の中共黨員達の気持ちを「国民党反動派が日々共產黨員と革命大衆を虐殺するのを見て、憤激の気持ちと命がけの精神が、かなり一般的に存在していた」⁽⁶⁾と回想している。張国燾も「かなりの人間が成敗を度外視しても、一度は強行しなければならぬと要求した」⁽⁶⁾と言っている。武力弾圧には武装闘争による反撃を、その戦いに成算があるかどうかは度外視しても、ともかくも一度は反撃を試みなければならぬ、このような怒りの感情が中共党内にはみなぎっていたのである。コミンテルンの方針転換は、まさにこの黨員達の気持ちに應えるものであったのである。

瞿秋白の指導に代表される「左傾路線」と言われるものは、このような諸要因の複合の結果として形成されたものであった。コミンテルンは中国革命での失敗を一気に挽回するような成果を収めて、その政治指導の「正しさ」と高い権威を実証しようと焦っていたし、中共黨員達は国民党への憎悪と復讐の情念に燃えていた。非常に過激な武装蜂

起路線というのは、このような人々の気持ちに應えるものであった。コミンテルン運動における政治路線は必ずイデオロギーの扮装をつけて登場するというのが、その習わしであったから、それは現状認識とそれから導き出された政策という、一つの理論体系として提示されねばならなかった。左傾路線の基礎となっているのは、社会矛盾の激化が新しい革命の爆発を準備している、という現状認識である。次のような認識である。「農民革命運動は一時失敗し混乱したが、最近では客観的に新しい高まりの可能性がただけではなく、この種の再度の高潮は不可避である。共産党が指導する農民組織の破壊、農村での白色テロの横行、これに伴う経済的圧迫の増加等は、ただ農村の階級矛盾、階級闘争を激化させるだけではなく、必然的に以前の規模と力量を更に超えるであろう新しい革命の爆発を準備している」。⁹¹

このような現状認識から出てくるのは、次のような「過激」な運動路線である。「土地革命は果敢であればあるほど、激しければ激しいほど、農民大衆はそれだけ多く闘争に加わる。地主豪紳の支配を撲滅することが激しければ激しい程、——すなわち国民運動の規模が広大であればある程、国民運動の勝利はそれだけ打ち固められる」。⁹² 同様の事は小資産階級に対する労働者階級の態度としても、くり返されている。労働者階級の闘争が果敢であればある程、激しければ激しい程、小資産階級はそれだけ左翼化し、革命路線の側に立つようになる、と主張されるのである。⁹³ このような「過激」な運動路線が現在の課題として、「革命的暴動」を提起するのは必然である。次のように言う。「……すべての客観的に可能性のある所では、すぐに各組織は革命的暴動を準備し、自己の任務がブルジョア軍閥政権を転覆し、プロレタリアと農民の民権独裁を建設することであることを、明確に認識しなければならない」。⁹⁴ このように勇ましい政治路線であるが、それは同時に国民党との合作の継続を指令し、小地主の土地没収を禁じるというような「右翼」的要因も残していたことは注目しなければならない。それがその後の党内闘争の大きな材料となるのである。

国共合作政策の「正当性」を主張するための配慮から、この種の「右翼」的要因も一部には残っていたが、コミンテルンが提起してきた新しい政治路線は、明かに過激な暴動路線であった。だがそれは相変わらず独善的で空想的なものでしかなかった。この暴動路線の基調をなしている現状認識によれば、中国社会の矛盾は深化し、爆発寸前にあらずであつたが、実際には民衆は全く蜂起に呼応しないばかりか、蜂起した軍隊を支持することさえしなかつたのである。八月一日南昌で蜂起した軍隊の、人々から見棄てられた悲惨な姿を、李立三は「沿道には全く農民運動はなく、加うるに反動派の宣伝のために、……沿道の農民は、噂を聞いて逃亡していた。食物と飲料は全く買うことができず、ひどい時には一日一杯の粥すら食べることができなかつた。渴すれば田んぼの溝の汚水を飲み、そのため兵士の病死は極めて多かつた。道中倒れる者は絶えることはなかつた」と書いている。こういう状態であるから三日の行軍で兵士の三分の一以上が逃亡したと李立三は続ける。大衆は爆発寸前である所か、共産党の運動に対する気持ちは全く冷えきつていたのである。そしてまた下部の党組織には、とてもこんな大暴動計画を実行する力量はなかつた。湖北省委員会の書記は「大衆党员は日一日と減少しているのに、党の戦術は依然として続行されている」と悲鳴をあげている。彼は省委員会も「不健全」であるが、「労働者もまた案外に弱かつた」とこの戦術を実行する困難を述べ、最後には「今回の暴動が失敗した場合にはその後はまだやり様はあるが、もし勝利したとすれば、一体どのような方法で、その時の環境に対処すべきなのであろうか」という驚くべき言葉でその発言を終わっている。¹⁴

このような下部組織の幹部の発言は、大衆の中にも党下部組織にも、大暴動を起こすような雰囲気もなければ、組織的力量も存在していなかつた事を語っている。このような事実はこの暴動計画なるものが、中国社会の情況からも、大衆の気持ちからも、遊離した空想的なものであつたこと示している。コミンテルンと中共党上層部の指導者達の「主観的興奮」にしかすぎないのである。周恩来の一九四四年の発言は、その事を間接的ながら肯定している。彼は「八

七“会議は機會主義を痛烈に批判し、暴動で国民党の白色テロに反対しなければならぬと指示したが、つまる所具體的にどうするのかは明確には指示しなかつた”⁽¹⁵⁾と言っている。張國燾も回想記の中で、南昌蜂起を実行した当事者達の間には、「出口はないという心理が最も多かつた」⁽¹⁶⁾と書いている。憤激にかられて武装闘争に踏み出してはみたものの、その後の計画は殆んど無いに等しいものであつたのである。これは政治行動の計画としては、無責任そのものである。多数の人間の貴重な生命が賭けられたものだけに、政治指導者の計画に対する責任は重い。がこの左傾路線の指導者達には、その自覚も乏しいようである。彼等は自分達の観念的興奮で現実離れをした失敗が必然であるような、武装的投機を次々と計画するのである。

ここに浮かび上がってくるのは、「無責任」と「投機」としか言いようのない政治運動、特にその指導部の姿である。彼等は誠実に中国社会の実情と大衆の生活、その気持ちを調査した上で、自己の行動方針を導き出すのではなく、現実を真面目に調査、考察することもせずに、ただ自分の主観的興奮から勝手なイデオロギー的作文を行い、過激きわまりない、危険な政治行動を導き出し、多くの誠実で、運動の理想に身を捧げている人々を、死線にさらしているのである。ここにあるのはやはり相も変わらぬ、コミンテルン運動の独善と空想性、そして大衆に対する無責任な「利用主義」という態度である。これまでのコミンテルンは、国共合作の維持という「右」の路線をとっていたので、運動は「抑制」と「待機」を基調としていた。この「右」の路線は国民党の大弾圧の中で失敗したので、今度は一転して大暴動の政治路線に転じたのである。表面的には百八〇度の転換をしたが、運動の本質としてはそれは何ら変わる所はないものであつた。それは依然として観念的なイデオロギー運動であつたし、上部指導部の、下部の実情を無視した、権威主義的命令による運動であつた。そして大衆に対しては無責任な犠牲を強いたのである。

それは成功の見込みのない不毛な運動であつた。コミンテルン運動の常として、それは相も変わらず空想的で、独

善的であった。仰々しいイジオロギー的作文で修飾されてはいたが、その新しい政治路線は、あまりにも中国の現実からも、民衆の気持ちからも遊離しすぎたものであったからである。毛沢東が自己の運動創造の契機となる「秋収蜂起」も、このような空想的運動の文脈の中で、計画され実行されたものであった。この計画そのものは、全く空想的なものであった、と言つてもよい。しかし、毛沢東は自己の運動の創造の契機として生かすのである。

(三) 左傾路線

毛沢東がマルクス主義を選択するという態度を新民学会の会友の前で表明したのは、一九二〇年一二月の事であったが、それ以後毛沢東は一貫してマルクス主義者であり続けた。彼は中国を救う道は、ロシア革命の道を歩むことにあるとする信念を、終生持ち続けたのである。第一次国共合作期にあつても、毛沢東は忠実なコミンテルン路線の支持者であつた。彼は国共合作の枠内で、農民運動の構築に全力を注いだのであつた。この態度は蒋介石の四・一二クーデター以後も変わらず、彼は武漢政府の下で農民運動を發展させようと努力している。この頃は共産党内よりも国民党の方に毛沢東の活動の重点はあつた。毛沢東は完全にコミンテルン路線の中にいたのである。

このような毛沢東に、国共合作に対する態度に変化が現れるのは、馬日事件以後の事である。国民党軍による湖南農民運動弾圧の実情を知つて、毛沢東は武力による反撃の必要を説き始め、ついには「上山」を主張するに到るのである。この頃は国共合作は事実上破綻しており、コミンテルンも路線転換しようとしている時であり、毛沢東のこの変化はコミンテルンのそれと軌を一にしている。毛沢東は「八七緊急會議」では、路線転換の最も有力な支持者として登場している。

毛沢東はこれまで政治路線の上では、コミンテルン路線の忠実な実践者として存在していた。だが革命家としての

体質は、コミンテルンのそれとは全く異質なものであった。コミンテルン運動は、既述したように本質的にはイデオロギー運動であり、その最大の支柱はマルクス主義の世界観にあった。勿論毛沢東もマルクス主義者を自認しているのであるから、マルクス主義の世界観を否定するような事はなかった。だが毛沢東にとつての最大の問題は、世界観に対する信念ではなくて、その信念を現実化するために何を行うかという現実的問題であった。現在の実践であり、その実践の実効性こそが、毛沢東にとっては真の問題であったのである。

このような毛沢東の観点からすると、国共合作は非常に有効性を持った政策であった。それは国民の多数派の形成という課題に、最も適的な政策だと毛沢東には思えたからである。毛沢東が革命運動において常に意識していたのは、圧倒的な多数派の形成という事であった。この態度は彼が最初に湖南自治運動に取組んで以来一貫しており、毛沢東が農民に注目したのも、この観点からであった。そして湖南農民運動を視察して以後、毛沢東は農民運動の持つ革命的力量についても、確信を固めたのであった。毛沢東は国共合作という政治路線は、この自分が中国革命の原動力であると確信した、農民運動を發展させる上で、非常に有効な政策だと考えていたのである。それは何よりも国民の多数派を形成するための絶好の旗印であった。それに農民運動を進めていく上に、国民党の持つ組織力と資金力も非常に役立つ。

毛沢東はこのような判断から国共合作を積極的に支持していたが、しかしその合作の当の相手である国民党の軍隊から、農民運動が弾圧されることは予測していなかった。彼は地主勢力の軍事力と戦わねばならないことは予測し、農民の武装の必要は説いていた。だが国民党の正規軍と農民運動の戦闘という事態は、全く予想していなかった。この事を毛沢東に教えたのは、国民党の軍隊であった。階級闘争はそれ程に非情である事を、国民党軍は毛沢東に教えたのである。毛沢東が農民の武装と武装闘争を提起するようになるのは、国民党軍の弾圧に対抗する必要があるからであつ

た。彼にとつては、それは農民運動が生き残る唯一の道であつたからである。コミンテルン運動の武闘路線への轉換は、この意味で毛沢東にとっては歓迎すべきものであつたのである。そしてコミンテルン代表ロミナーゼが、これまで陳独秀から常に非難されてきた湖南農民運動も高く評価し、逆に党中央を「全く革命を売り渡したに等しい」⁽¹⁾と非難した事も、毛沢東を勇気づけたであろう。毛沢東は「八七緊急會議」には勇躍して参加し、四つの事を主張している。

毛沢東が主張したのは第一に国民党との関係である。彼は「皆の当時の根本観念は、国民党は他人のものであると考へたことであつた。それが人が住むことを待つてゐる空屋であることを知らなかつた」とこれまでの誤りを指摘し、「労働大衆を国民党に入れて主人とする」ことを主張している。この時点では毛沢東は、国民党の旗を捨ててゐる事は考へてゐなかつたのである。第二は農民問題である。ここでは毛沢東は従來の党の政策を改めるべきことを説いて、「農民は革命しなければならず、農民に接近する党も革命しなければならぬ」と言つてゐる。第三は軍事問題であり、ここで、毛沢東は有名な「鉄砲から政權は生まれる」というテーゼを提出する。次のような発言である。「従來我々は孫文を専ら軍事運動のみを行うと非難してきたが、我々は丁度その反対で、軍事運動を行わず、専ら大衆運動のみを行つてきた。蔣介石、唐生智は銃をとつて身を興した。我々だけはそうしない。現在注意しなければならないが、依然として断固たる考へはない。……以後非常に軍事問題に注意せねばならない。政權は鉄砲によつて獲得するものだという事を知るべきである」。最後は組織問題である。これまでの党組織のあり方を批判して「以後上級機関は下級の報告を誠実に聞くべきである。そうしてこそ不革命から革命的なものに変わることができる」と言う⁽²⁾。この會議で毛沢東は農民問題に対しても発言している。「すべての土地を沒收」するという政策に「小資産階級を動揺させる」として反対するロミナーゼの意見に対して⁽³⁾、毛沢東は反対はしていないが、「小地主問題の解決」の重要性を指摘している⁽⁴⁾。

毛沢東の発言は、すべてこれまでの中共党の運動方針の変更を求めたものであり、革命運動の新展開を意図する革命家毛沢東の面目躍如たるものがある。発言の中心をなすのは言うまでもなく武装闘争の主張である。武装闘争を主張する毛沢東の気持ちがいかなるものであったかについては、いくつかの証言がある。李維漢は自分と蔡和森が毛沢東を政治局に入れるように主張したが、毛沢東は「秋收蜂起に参加するよう準備しているので政治局に入ることとはできない」、と言って、断つたと回想している⁽⁵⁾。また上海の中央で働くようにと要請した瞿秋白に対して、毛沢東は「私は高樓大廈に住もうとは思わない。自分は山に登り山賊と交友を結び、農村革命闘争を展開する」と答えたとも伝えられている⁽⁶⁾。陳新憲とい人物の回想は「八七会議」の後板倉に居る楊開慧の所を、変装してたずねてきた毛沢東の事を書いているが、毛沢東は楊開慧を霞姉さんと呼ぶ何鈞という人物に対して、笑いながら次のように言ったという。「我々はまた別れなければならぬ。君の霞姉さんはここに何日か居たが、また帰らねばならない。これは革命の常理だ。革命が勝利した後我々は再びここで団欒しよう⁽⁷⁾」。この言葉は秋收蜂起を前にした、毛沢東の妻楊開慧に対する別れの言葉であったであろう。家族との別離も決意し、毛沢東は武装蜂起にすべてを賭けていたのである。

中央で運動方針を策定し、下部に命令するだけの人間とは全く異つた態度である。毛沢東は自らをその渦中に投じ、武装闘争の先頭に立つ決意を固めていたのである。毛沢東にとっては、それは自らがこれまで全身全霊をこめて構築してきた農民運動を救い出す、唯一の道であったからである。弾圧にさらされ壊滅寸前にまで追いこまれた農民運動を再建し、農民革命を切拓くには、銃をとる以外には選択の道はないと毛沢東は確信していたのである。

国共合作の決裂、この新しい情勢の中での、農民革命の新しい展開として、毛沢東は武装闘争を決断したのであった。この毛沢東の決断は、コミンテルンの方針転換と結論を同じくするものであった。しかし両者の間には、根本的な相違とも言うべきものがあつた。同一の結論に到達する、その動機と過程、思考の内容は全く異質である。コミン

テルンの方針転換を主導したのは、その政治的権威への配慮であり、それが根拠としたのは「主観の興奮」としか形容しようのない、恣意的なイデオロギー的情勢分析であった。毛沢東はこれとは対極的に、自分が構想した革命運動の実践的課題を追い求めて、そこに到達したのであった。観念と実践、この対極的立場から革命運動に迫ってきた両者は、「八七会議」の時点では、その政治路線とそれを支える心情を共有していた。だが秋收蜂起という革命闘争の実践の過程で、この両者の相異は政治的亀裂として現象してくることになるのである。

第二節 秋收蜂起

(一) 中共中央と毛沢東

秋收蜂起の計画は、何度もその姿を変えている。中共中央も何度も意見を変えているし、毛沢東も同様である。そして当初は歩調を同じくしていた両者は、意見を対立させたまま蜂起の決行に突入し、実行過程において、両者は決定的にその亀裂を拡大していくのである。

秋收蜂起の計画を最初に提出したのは、一九二七年七月一二日コミンテルンの指示によって成立した張国燾、李維漢、周恩来、李立三、張太雷の五人をメンバーとする臨時中央常務委員会である。臨時常務委員会は七月二四日に「武漢の反動時局に対する通告」⁽¹⁾の中で秋收蜂起の計画を提出している。秋收期に農民の減租抗租の運動を展開し、郷村に農会の政権を樹立するという内容の非常に簡単なものである。この頃中央で農民蜂起計画を主導していたのはむしろ毛沢東である。彼は七月二〇日「中央通告農字第九号」⁽²⁾を執筆しているが、そこで中国革命が土地革命という革命の新段階に達したと規定し、農会政権の建設のための武装闘争という方針を提起している。毛沢東は農民武装の方法

として農協会員が軍隊の中に入って武装を奪取する工作を進める事や、「挨戸団」「徐衛団」などの合法的名義で武装する事とともに、「上山」の構想も提起している。また七月の下旬には「湖南運動大綱」⁽³⁾を執筆し武装闘争、土地革命、革命政権の樹立を内容とする、大規模な新しい革命運動の構想を展開している。

「大綱」はまず次のように言う。「湖南の特別運動は汝城県を中心とする。この中心から進んで桂東、宜章、郴州等四五県を占領し、一つの政治情勢を作り出し、政府のような革命指揮機関を組織し、土地革命を實行し、長沙の唐（生智）政府と対抗し、湖西の反唐部隊と連絡する」。これに続けて毛沢東はまた湖南革命政府は「全省農民暴動の先鋒隊」であり、「革命の力量を作り出し、唐政府を転覆する目的を達成」せねばならないと言う。これは明らかに湖南省を先頭とした全国的農民暴動の計画である。この計画を實行するために、毛沢東は非常に軍隊の軍事力を重視していることも注目させられる。「八七緊急会議」における毛沢東の発言は、このような計画を背景とするものであり、決して一般論ではなく、実行プランであり、それもかなりの成算があると考えられた実行のプランであつたのである。

八七会議の後の八月九日に開催された政治局会議では「湖南省委員会の中央への報告」の内容である、「湖南で一師団を編成し南昌軍と共同して広東を奪取する」という主張が討論されている。この時毛沢東はこの計画を批判し、次のような発言を行っている。「一師団を編成して広東に行くのは間違っている。皆はただ広東だけを見るべきではない。湖南も重要である。湖南の民衆組織は広東に比して大きい。不足するのは武装である。現在の暴動の時期に当たっては、更に武装が必要である」。この時に彼は「たとえ失敗しても、広東に行く必要はない。山に登るべきである」と「上山」の構想をつけ加えている。⁽⁴⁾この毛沢東の主張は中央政治局で承認され、中央は八月九日の「湖南省委への手紙」の中で「四省暴動を南昌暴動に呼応する軍事勢力とするのは、それは本来転倒である」と湖南省委を批判している。そしてまた全省暴動方針を堅持して湖南省委に対して「ここで明らかにしておかねばならないのは、湖南の計画は全

省暴動の一部分であることである。ただ全省暴動の下でのみ、湖南の計画は実現できるし、意義を持つ。絶対に本末を転倒してはならない」と嚴重に注意している。⁽⁵⁾この政治局会議では湖南省委員会の改組を決定し、毛沢東と彭公達
が新たに省委員に加わり、彭公達が省委書記となっている。そして毛沢東は中央特派員の身分で秋収蜂起を組織する
ために武漢を離れ、湖南へ出発するのである。後に毛沢東はこの時の自分の予定は次の五つの点を実現を要求したも
のであったと語っている。⁽⁶⁾(一)省党部の国民党からの完全な分離、(二)労農革命軍の組織、(三)大地主および中小地主の財
産の没収、(四)国民党から独立した共産党権力の湖南における確立、および(五)ソビエトの組織の五項目である。湖南に
帰った毛沢東の行動は、事実この五項目の実現を目指していたことを示している。しかしその事が中央との対立を激
化させることになるのである。

この頃までは毛沢東と中央の歩調は一致している。しかしこれ以後両者の意見の相違が表面化してくる。その一つ
の原因は、湖南省の農民運動の实情を知った毛沢東が、自分のプランに変更を加えた事にもある。湖南省に帰った毛
沢東は八月一八日長沙近郊の沈家大屋で開かれた、改組されたばかりの湖南省委に出席する。この会議では土地政策、
武装闘争、暴動計画の練り直し、国民党の旗の問題が討論されたと言われている。⁽⁷⁾土地没収の範囲をどこに設定する
か。この頃の中央の方針は五〇畝以上の大地主の土地、公有地のみ没収という方針であったが、以前からこの方針に
批判的であった毛沢東は、次のように発言している。「単に大地主の土地を没収するだけでは、農民の要求と必要
を満足させることはできない。全部の農民を掌握するには、必ず地主の土地を没収し農民に与えねばならない」⁽⁸⁾。また
蜂起の問題に対しては、武装闘争の決定的重要性を主張している。「(一)湖南の秋収暴動の発展は、農民の土地問題を解
決するためである。……暴動を發動しようとして、ただ農民の力に依拠するだけではいけない。必ず軍事の援助がな
ければならない。一、二連隊の兵力があれば行動を起こすことができる。そうでなければ失敗に帰する。(二)暴動の発

展は政権を奪取しようとするものである。政権を奪取しようとして、兵力の擁護なくして奪取しようとするのは、自らを欺く事である。現在は百分の六〇の精力を軍事運動に注がねばならない。鉄砲で政権を奪取し、政権を建設する事を実行せよ。⁽⁹⁾

またこの会議では暴動の範囲を縮小する事が決定された。毛沢東は暴動の力量が不足している事を理由に、暴動を長沙を中心とした湖中に縮小する事を主張し、省委員会のメンバーもこの毛沢東の意見に賛成し、そう決定している。この時全省暴動を主張したのは書記の彭公達一人であった。⁽¹⁰⁾この決定は毛沢東が執筆したと推定されている省委員会の中央への報告では、全省暴動を肯定するようなニュアンスをこめて次のように書かれている。「一、湖南の秋收暴動は長沙を暴動の起点とし湖南、湖西等もまた同時に暴動を起こすことを決定した。断固として湖南全体を奪取し、土地革命を実行し、労農兵ソビエト政権を樹立する。二、長沙暴動は労農を主力とする。陳烈、李隆党の二連隊を移動させ暴動の発火点とする」。⁽¹¹⁾最後に国民党の旗の問題であるが、この問題は中央への報告の中で次のように書かれている。「我々は高々と共産党の旗を掲げて蔣、唐、馮、閻等の軍閥が掲げる国民党の旗と対抗すべきである。国民党の旗は既に軍閥の旗となつてゐる。共産党の旗のみが人民の旗である。この点は私は湖北に居る時には未だ気づかなかつた。湖南に来てここ数日、唐生智の省党の様子とこれに対する人民の態度を見て、国民党の旗は再び掲げることができず、掲げれば必ず失敗するであろうと断定できるようになつた」。⁽¹²⁾この報告はまた、「労農兵ソビエト政権」の樹立をも要求している。

「すべての土地没収」という急進的な土地改革と軍事力重視の武装蜂起の方針は、国共合作決裂後に毛沢東が抱くようになった確信であるが、国民党の旗を捨てる問題と暴動の範囲の縮小は、毛沢東が湖南の実情を知った後、それに適合するように出してきた新しい方針である。何よりも実践的革命家である毛沢東の鋭い現実感覚は、湖南の実情を

知った時に方針の変更の必要を直感したのである。暴動を起こす軍事力は乏しく、農民運動の組織も一時の隆盛はない。そして人々の心は国民党から遠く離れた去っている。毛沢東はこの革命陣営の力量と実情に合わせて、これまでの計画を変更し、新しい方針を提起したのである。事実この頃の湖南省の党組織と大衆組織は大打撃を受けていた。全国で殺され、負傷し、あるいは行方不明になった一三万人のうち半数近くが湖南人であった。(これらの数字は明らかに上海を含んでいない)五月二一日の長沙の虐殺以前に、湖南省全体で二万以上、長沙にはそのうち約三千の共産党員がいた。ところがいまや全省で五千以下、長沙ではわずかに千人しかいないのである。¹³⁾

現実の共産党の大衆運動への影響力と自分自身の組織の実力に立って、蜂起計画の変更を求める毛沢東の行動は、中央の目からすれば、決して好ましい事ではなかった。空想的な蜂起計画に熱中している彼等には、毛沢東の問題意識そのものが全く理解できなかったのである。コミンテルン代表ロミナーゼと瞿秋白が指導する党中央は、毛沢東が主導している湖南省委を批判する厳しい書簡を送付してくる。¹⁴⁾中央の書簡は暴動計画には、二つの誤りがあるとす。一つは「軍事力に偏重している」ことである。それは大衆の革命的力量を信頼しない「一種の軍事的冒険」だとするのである。もう一つは長沙を起点とする暴動の計画についてである。中央は「湖南湖中の暴動は、盡く可能な所が同時に発動することで、一地点が孤立に陥る事を免れる」と言う。長沙を起点とするのではなく、全省で同時に蜂起すべきだと中央は主張しているのである。政権の形式については、中国はソビエト政権は時期尚早だとして反対し、「我々は依然として国民党の名で労農の民主政権を賛助しなければならない」とする。土地問題に対しては、「大地主の土地没収」であって、小地主に対しては減租のスローガンを提出する」と言っている。湖南省委と中央との意見の相異は、ここで非常に明らかになったのである。

党中央のこのような批判に対して、湖南省委は八月三〇日再度会議を開き討論しているが、この席上毛沢東は強硬

に自分の主張をくり返したと言われている。そして湖南省委も毛沢東の主張に同意する。会議の結論は毛沢東が書いた中央への手紙に要約されている。⁽¹⁵⁾この手紙は中央が指摘した二つの誤りに反論したものである。手紙は暴動の主力はあくまでも労農であって、軍事力は労農の力の不足を補うものであると主張しつつ、「軍事に注目せずに民衆の武装暴動をしようとするのは、矛盾した政策である」と反論する。また暴動の範囲については、長沙を起点とする事は決して湖南を放棄するものではないとしつつ、衡陽を第二の発火点としない理由を次のように説明している。「我々の力量はただ湖中で蜂起できるだけであるからである。各県で暴動を起こせば力が分散してしまい、湖中の暴動計画さえ実現できない恐れがある。だから我々は衡陽を第二の発火点としないことを決定したのである」。この会議ではまた湖南省委前敵委員会と行動委員会を組織することを決定し、毛沢東を前敵委書記、易礼容を行動委書記に任命している。この会議終了後、毛沢東はすぐに軍事力編成のため安源、銅鼓地区に向けて出発するのである。

湖南省の意見も考慮して、党中央が最終的な秋収蜂起の計画を策定したのが、八月二十九日に中央常務委が採択した「両湖暴動計画決議案」⁽¹⁵⁾である。この決議案は相変わらず、農民自身の組織と行動に依拠せず、専ら土匪や軍隊の行動に依拠するのは、「機會主義の一種の形式的表現である」と毛沢東等湖南省委の計画を批判する。そして湖南の暴動については、湖南各県、湖中湖東各県、湖西と三つの地区に分け、全省の同時蜂起、湖南省臨時革命政府樹立という計画を提出している。湖南が九月六日、残り二つの地区が九月一〇日の蜂起、そして長沙が九月一二、三日に蜂起し、最後はすべての蜂起勢力が長沙に進攻し、湖南省政府を転覆し、政権を奪取するという計画である。土地革命については「大地主の土地没収」という方針は変えていないが、政権については「民選革命政府」と変えている。そして行動方針については、土豪労紳とすべての反動派を殺しつつ、その財産を没収することや鉄道、水陸交通、郵政機関、電線を破壊しつくして、恐慌状態を作り出すと、非常に過激な主張がなされている。

中央の湖南省委の意見に対する最終的態度は、九月六日付の、湖南省委の八月三〇日付の手紙に対する回答で示されている。⁽⁷⁾ここでは「すぐに断固として中央の計画を遵守して実行し、暴動の主力を農民の中に築くことには、いささかの躊躇も許さない」と言い、湖南省委の湖中暴動計画を「実に大きな誤りである」と断じ、更に「政權、国民党と土地没収の諸問題については、中央は諸君が中央の政策に疑いを持つのは誤りであると考え。中央は湖南省委に、絶対に中央の決議を執行することを訓令する。少しのためらいも許さない」と高圧的に命令している。ここにはもう話し合いや討論の余地はない。両者の意見は決定的に決裂したわけである。湖南省委は中央の「訓令」にもかかわらず、自己の方針で蜂起にとりかかるのである。

中共中央と湖南省委の間にある蜂起の規模と政策の対立についての具体的内容は上述したが、この表面的な意見の対立の根底にあるものについて考察を加えておくことが必要であろう。中共中央にあるのは一種の観念的ロマンチズムと国共合作政策の負の「遺産」の重圧である。彼等はそのイデオロギイ的现实認識によって、中国の現状を爆発寸前の矛盾の坩堝だととらえる。だから彼等の予測によれば、武装蜂起という一点の火花を点じる事で、一挙に大衆暴動の炎は燃え上がるはずなのである。彼等があくまでも蜂起の主力を農民に置くことを主張する背景にあるのは、このようなイデオロギイ的现实認識である。しかし彼等は国共合作政策の「負の遺産」を引きずっている。従つて未だ「国民党」と「大地主の土地没収」という呪縛から離れることができない。そこでの土地政策では大地主に限定した穏便な政策となるし、「左派国民党の旗」を掲げるといふ事になるのである。このような大暴動という計画にはそぐわない、実に不徹底な政策である。

現実主義者毛沢東の眼は、そして現場で蜂起の準備を進めている湖南省委のメンバーの眼にも、中央の計画の現実離れした空想性と、その政策の不整合性はすぐに見抜くことができた。武漢の中央で活動していた時には、熱にうか

されたように、全国的大暴動の計画に熱中していた毛沢東であったが、湖南の現実と党の下部組織の実情を知った後には、彼はすぐにその夢想を捨て、現実立帰るのである。そして地道に、運動の力量と大衆の気持ちに依りて、可能な形の蜂起の構想に自らの計画を変更したのである。だが相変わらずイデオロギー的空想に夢中になっている中央は、この毛沢東の変化を認めることができず、官僚主義的な絶対的命令を下達してきたのである。両者の意見の対立の根底にあるのは、イデオロギー的觀念に依拠するか、現実的判断に依拠するか、自己の政治的權威の護持を主眼とするか、大衆の組織化への政策の有効性を主眼とするか、という態度の相違にあつた。イデオロギー的觀念的革命家と実践的革命家の対立と言ってもよい。この人間としての質的相違が、その後蜂起という實際問題を通して、行動方針の食い違いとして現象してきたのである。

(二) 蜂起の決行と亀裂の拡大

毛沢東は八月三十一日、汽車に乗って安源に向かつて出発する。途中株州に寄り蜂起計画を伝達し、九月初め安源に到着し、張家湾で秋收蜂起の軍事會議を開き、最終的な蜂起の実行計画を決定する¹⁾。この會議では労働革命軍第一師団を編成することを決定し、併せて師団長余洒度、副師団長余賁民、參議長鐘文璋という人事も決めていた。またこの會議で決定された蜂起の行動計画は、次のようなものであつた。軍隊は三路に分ける。第一路の第二連隊は萍郷と醴陵を攻撃し、長沙に向かつて包圍の形勢をとる。どのようなことがあつても萍郷、安源は放棄せず、敵が自分の退路を断つのを防ぐ。同時に株州区委は株州の労働大衆を動員し、敵の後方を攪乱し、醴陵の農民暴動と呼応する。第二路の第一連隊は、修水から平江に向かつて進攻し、併せて平江農民の全県暴動を發動し、平江を奪取して長沙に向かつて進攻する。第二路の第三連隊は、銅鼓より瀏陽に向かつて進攻し、併せて瀏陽農民の近郷における暴動を發動

し、長沙に肉迫する。秋收蜂起の全体は毛沢東が書記をつとめる中共湖南省委前敵委員会が指導する。このような計画を内容とする手紙を受け取った湖南省委は九月五日常務委員会で討論し、九日の暴動開始、一日各県の暴動、一日長沙暴動というスケジュールを決定し、各地に通知する。

蜂起は九月九日開始される。毛沢東が国民党の民団に逮捕され、危ない所で逃走に成功したのはこの間の事である。毛沢東は漢陽の鉞夫や農民自衛隊の間を蜂起軍を組織するために歩きまわっている間に、民団に捕まったのである。国民党は共産党の疑いのある者は次々と銃殺にしていた時であるから、毛沢東も民団の本部まで連れていかれば、銃殺されていた可能性が高い。しかし毛沢東はその寸前二百米くらいの所で脱走に成功するのである。この間の事情はスノウに詳しく毛沢東自身が語っている。²⁾ 九日、蜂起は鉄道労働者の線路の爆破と第一連隊の修水での決起を以て開始される。その後一週間、長沙には一本の列車も到着しなかったという。だが蜂起に対する国民党軍の防備は固く、各地の労働者、農民の蜂起も期待された程のものではなく、蜂起軍は次々に敗退を重ねていく。第一連隊（平江労働義勇軍が主体）は九月一日金坪を攻撃している際に、国民党軍を再編した第四連隊が突然背後で反乱を起し、腹背から攻撃を受けるといふ事態になり、大損害を受けて撤退を余儀なくされる。第二連隊（安源炭鉞労働者が主体）は萍郷、未克老関を攻撃して勝利し、醴陽に向い、当地の農民蜂起軍と一緒にたつて醴陽を占領する。革命委員会を樹立し、土地の没収及び労働組合と農民協会の復活を宣言したが、優勢な軍隊の反撃にあい、醴陽を撤退する。一六日に瀏陽を攻撃したが、敵の優勢な兵力に逆に包囲され、一七日には大損害を出して文家市方面へ撤退する。この時三分の二の兵力を失ったと言われる。第三連隊（瀏陽農民義勇隊が主体）は九月一日江西省銅鼓を出発し、瀏陽県の白沙東門市を占領したが、一四日には敵の優勢な軍隊と激戦して敗れ、東北方向へ向かって退却せざるをえなくなる。この間醴陵、平江、株州、瀏陽の各地で、農民蜂起は起きているが、当初期待された程の勢いを持つものではなかつ

た。

毛沢東は第三連隊を率いて瀏陽上坪に着いた九月一四日の夜、連隊の幹部会議を召集し、蜂起の各部隊が敗北したという状況に基づいて、長沙攻撃計画の放棄を決定し、前敵委員会書記の名で、各部隊に文家市に合流するように命令を出す。そしてまた手紙を書いて、湖南省委に長沙暴動の中止を提案する。湖南省委は一五日、一六日早朝から予定していた長沙暴動の計画の中止を決定する。

九月一九日蜂起の全部隊は瀏陽文家市で合流するが、その晩毛沢東の主宰で開かれた前敵委の会議こそは、毛沢東の新しい革命運動創造の出発点となるべきものであった。会議では師団長余洒度の「瀏陽を占領し、直ちに長沙を攻撃する」という意見と毛沢東の長沙攻撃放棄論との間に激烈な論争が展開されたという。毛沢東の主張は次のようなものであった。「現在の情況は敵が大きく我は小さく、敵が強く我は弱い。革命は既に退潮の時期にある。各路の部隊はすべて敗北した。長沙進攻の計画は放棄し、迅速に平沙、瀏陽地区を離れ、羅霄山脈に沿って南へ移動し、落着く場所を見つけるべきである」⁽⁴⁾。この毛沢東の意見は総指揮官盧德銘の支持で、大多数の同意を得て採択され、蜂起軍の今後の行動の方向を決定することになるのである。

だがこの会議の決定は、中共中央の全国的な大暴動計画という、新しい革命路線を、最初の一步において否定するものであった。全計画を全くの水泡に帰せしむるような決定であった。中央が長沙進攻の放棄を承認しないのは当然の事であった。中央は一九日の湖南省委への手紙で次のように厳しく蜂起計画の実行を命令する。「中央は長沙暴動は不幸にして機会を失ったと考えるが、しかし客観的には湖南暴動の前途には依然として希望がある。この時に省委は萍、瀏、平一帯の労働軍に長沙進攻を命令するとともに、即時長沙暴動を爆発させるべきである」⁽⁵⁾。そして長沙暴動計画の放棄という湖南省委の決定を「敵前逃亡」と断罪し、組織上の処分をも示唆している⁽⁵⁾。事実一月の臨時政治局拡大

會議は、「湖南省委の農民暴動に対する指導は、更に完全に中央の戦術に違反している」として、彭公達、毛沢東、易礼容、夏明翰の湖南省委の委員全員の資格を剝奪し、彭公達、毛沢東はともに政治局候補委員を免職するという決定を行うのである。⁶⁾

中央の長沙暴動という湖南省委への命令は、あまりにも現実離れしたものであった。現実に圧倒的に優勢な敵の兵力を前に、蜂起軍は完全に敗退したのである。それに装備も不完全な労農軍が、新たに蜂起した所で、新しい犠牲者を増やす以外には意味を持ちえなかつたであろう。ここに到つて中央と毛沢東との亀裂は、決定的なものへと拡大したのである。毛沢東も湖南省委も、中央の命令を全く無視する。そして彼等は独自で自分達の行動を決定するのである。この時、毛沢東が自分の行動が持つ意味を自覚していたかどうかは、定かではないが、しかし、この毛沢東と前敵委員会の決定こそは、不毛なイデオロギー一辺倒の革命運動を転換し、中国の大地に根ざす現実的な革命運動への出発の第一歩であつた。中国の革命運動における創造は、この現実的主義をもつて始まる。中央が処分を決定した頃、毛沢東はその事も知らず、井岡山の山中で新しい革命運動の創造に着手していたのである。

第三節 新しい運動の創造への出発

(一) 文家市での毛沢東の講話

前敵委員会が長沙攻撃の放棄と南下の方針を決定した翌日の朝、九月二〇日毛沢東は、蜂起軍の全兵士を集めて講話をしている。秋収蜂起に失敗し、新しい目標を持つことができず、動揺し、自信を失いつつある兵士達を前にしての講話である。その時の毛沢東の態度と講話の内容こそは、敗北した軍隊の運命に決定的な意味を持つものであつた。

兵士達の目は最高指揮官毛沢東を注視している。彼の動揺と自信喪失は、即軍隊の瓦解へと直結したであろう。ただ最高指揮官の気迫と毅然たる態度こそが、軍隊の統一を維持しえた。この時残っていた約千五百人の兵士達の前に立つ毛沢東は、痛い程最高指揮官の責任を自覚していたであろう。

この時の毛沢東の態度と講話の内容については、何人かの人間の回想が残されている。¹¹⁾正式の記録ではなく、数十年を経た後の回想であるから、内容には濃淡の差があり、事実にも食違ひがある。しかしそれらの回想を読むと明確に、一人の人間の姿が浮かび上ってくる。この時は毛沢東は足を負傷しており、歩行にも困難を来していたようだから、体調は決してよくはなかった。しかし彼の中にある燃えるような革命への情熱と最後の勝利への絶対的確信、今後の軍隊の行動についての明確な方針は、動揺していた兵士達を落ち着かせ、今後の行動への自信を与えたようである。回想の中からは全軍を一体として牽引する、人間的力量を持った、情熱と確信にあふれた一人の人間の姿が彷彿して来る。

当時主計官であった范樹徳は部隊の前に立った毛沢東の姿を「毛委員は両手で皆に坐るように促し、部隊は二歩前進して坐った」と語っている。それから台の上に登った毛沢東は革命の情勢を解説し、今回の蜂起の失敗を認めつつ、決してそれが絶望すべき事でないことを力説し、今後の部隊の採るべき方針を説き、そして革命は最後には勝利するという絶対的確信を語ったと書いている。当時第三連隊の兵士であった黄永勝の回想は比較的詳細であるが、彼は毛沢東は次のように講話を始めたと書いている。「彼はまず我は、どのような軍隊であり、何のために戦争をし、誰と戦争しているかを語った。彼は蒋介石がいかに革命を裏切り、多くの革命的労農大衆を虐殺しているかを語り、我々が敵の血腥い虐殺に反抗し、革命事業を継続完成するためには、必ず断固として徹底して、闘争せねばならず、これ以外には第二の活路はないと呼びかけた。そして反動派と闘争するには、必ず銃を持たねばならない。過去の我々の失

敗は、銃を持たなかったことにある。革命的武装がありさえすれば、何事も立派にやれる。しかし堅強な軍隊を作りあげる事は、決して容易な事ではない。この事は我々の隊伍の中のすべての人間に遠大な理想と、犠牲を恐れぬ精神を持つことを要求していると語った。「秋収蜂起の失敗については、毛沢東は次のような事を語ったようである。当時第一連隊で後勤部副官を担任していた楊立三は「今回の、両湖秋収暴動は二つの小さな敗け戦をやったが、これは大した事ではない。我々の闘争はやつと始めたばかりである。我々は、湖南、湖北、江西、広東に組織された幾千幾万の労働者農民を持ち、我々と一緒に反革命と闘っている。我々の力は偉大である。反動派は決して恐るに足りない。我々が固く団結し、勇敢に戦いを継続しさえすれば、我々は勝利することができる。」と毛沢東は語ったと回想している。また部隊の今後の行動については頼毅という人物は大意次のようなものであつたと書いている。「同志達、敗戦は大した事ではない。失敗は成功の母である。現在我々は大都市を攻撃する時ではない。革命はやりとげなくてはならないし、我々の力を大きくせねばならない。大都市を攻撃しなくて、何をするのか？ 広東、湖南、江西三省の省境に行くのである。この半封建半植民地の社会で軍閥割拠の時期にあつては、それら境界地方も誰かが統治している。我々も統治するのである。我々はそこに行つて休息し、そこに行つて根拠地を建設するのである」。ある回想はこの時毛沢東は井岡山という具体的名前をあげたとしているが、それは確かではないであろう。井岡山を選択したのは、もつと後の事と考えた方が自然である。最後に革命の信念であるが、毛沢東は、小石と大水壺の比喻を使って、自らの信念を説明している。第三連隊の兵隊であつた李景全の回想である。「革命に立ち上らねばならない。我々の隊伍が小さく、人数が少ないことのみを見てはいけな。ただ武装闘争を堅持しさえすれば、力は大きくなっていく。我々はちょうど小石のようなもので、蔣介石は大きな水壺のようなものである。小石でその大きな水壺を打砕かねばならない。将来必ず解放の日を迎えねばならない」。

毛沢東の講話は兵士達に大きな勇氣と確信を支えたようである。頼毅は「皆は毛主席の講話を聞いて心が明るくなり、前途が明かるくなった」と書いており、楊立三は「皆は満面笑顔で、失敗の情緒は一掃された。部隊は新しい生命を得たようであった」と書いている。回想には避けられぬ潤色を割引いても、毛沢東の講話が部隊の行動に明確な指針を示すものであっただけに、兵士達の動揺を押し、彼等にある種の自信を与えるものであった事は事実であろう。部隊は再び統一して行動できる状態になったのである。九月二一日部隊は湖南省と江西省の省境にそびえる羅霄山脉に沿って南下を開始する。目標とする所は湖南省である。だがこの逃避行も決して順調には進まなかった。

九月二五日蘆溪を出発して蓮花へ向っていた部隊は、途中敵軍の攻撃を受け、二、三百名の損害を受ける。この時総指揮官蘆德銘が犠牲となっている。二六日には蓮花市を攻撃し、保安隊に捕われていた共産黨員等七〇数名を監獄から解放し、食糧倉庫を開き大衆に食糧を分配している。そして二九日に永新県の三湾村に到着し、有名な三湾改編を行うのであるが、「湘贛辺秋收起義研究」は、毛沢東が井岡山に根拠地を定めることに決心したのはこの間の事であったとして次のように言う。「労農革命軍が水口に到着した時、蔡陵の敵が襲撃してきた。そこで西の遂川大汾へ向ったが、また肖家壁の匪賊の襲撃に会った。毛沢東は部隊を卒いて井岡山の周囲を一周した後、遂に井岡山に登る決心を下したのである。この時、湖南の敵は朱榮光及び羅霖の部隊六千七百人、銃四千百挺、その他宗鶴庚、許克祥、范石生の部隊七千人余がいた。湖南に行っても落着くことはもう容易ではなかった……戦略上機動的であり柔軟な毛沢東は長沙攻撃計画を放棄したと同じように、湖南に行く計画を放棄し、井岡山に居をかまえることに改めたのである」⁽²⁾。この意見は説得力を持つ。毛沢東は湖南に向って進軍する途中で、彼我の軍勢力を比較勘案の後、最も現実的で可能性のある道として、以前から念頭にはあった井岡山を選択する決心をしたのである。労農革命軍の三湾での改編は、井岡山に登り根拠地を建設するという、毛沢東が決心した新しい革命運動への出発のための準備であった。

(二) 三湾改編

三湾改編に先立って師団長余酒度と毛沢東の対立が爆発している。陳樹草の回想は、この間の事情を伝えている。¹⁾三湾に到着した日の夕食後、余酒度が会議の通知をしたが、なかなか人が集まらず、暫くしてやって来た毛沢東は余酒度に向つて「君は今何の会議を開くのか？ 我々数千人の生命がまだ危険な状態にあるというのに、会議を開いて何の役に立つのだ！」と詰問し、両者の間にはテーブルを叩きながら烈しい言葉が交わされ、気まずい空気の中で散会したという。この事件を回想しながら陳樹草は「思い起してみれば、当時の指導部内で意見が紛糾していた事が解る」と書いている。恐らく新しい行動に踏み出そうとしている毛沢東には、中共中央の方針に忠実に長沙攻撃を主張するような人物には、我慢がなくなつたのだと思われる。毛沢東は中共中央の意思とは独立した、自己の運動の創造を決意していたのである。このような時に、あくまでも中共中央の影響力を背負い続けている人物が、指導部の一員を構成している事に、毛沢東はもう我慢できなくなつたのである。事実改編において余酒度は、その職務から排除され、それが原因で彼は後に国民党に奔ることになるのである。

秋収蜂起軍を再編成しなければならない理由は、確かに存在した。兵士達の大半はこれまで兵士の経験が全くない鉞夫や農民、それに旧国民党の兵士から成つていた。従つて国民党軍の旧習はそのまま持ちこまれていたし、また戦争には全くの素人の指揮官と兵士も多かつた。それにうち続く敗戦と困難極まる敗走の毎日である。兵士達の志気が衰へていくのは当然である。脱走者も続出した。このような部隊の状況を韓偉という人物は、次のように回想している。「この時、数回の戦闘での敗戦、うち続く困難な行軍、極端に苦しい生活のために、部隊員の減少は深刻で、全師団は一千人足らずであつた。組織は不健全で、戦闘部隊は充実せず、部隊の思想は混乱していた。混乱、悪劣、危険

な環境は、この創設して間もない労農革命の武装部隊を、厳しい試練にさらしていた。……加うるに部隊の構成は複雑で、管理教育の面で多くの旧軍隊の遺習を残していた。将校と兵隊の待遇は大いに差があったし、兵士を殴ったり罵ったりする事も、時には起った。これらの問題はまた上下の関係にも影響した。将校と兵士の関係と兵隊達に積極性が欠ける事は、部隊の団結を妨げていた」。

九月三〇日。兵士達を広場に集め、そこにあった石の上に立って毛沢東は、演説をしている。この時の演説の内容は次のようなものであったという。同志達、敵は我々の後で時々銃をうっている。これは大した事ではない。……皆は誰でも母親から生まれたものだ。敵も二本の足を持ち、我々も二本の足を持っている。……賀龍同志は包丁一本から身を興した。現在は軍長で一軍を卒いでいる。我々は今はただ二本の包丁を持っているだけだが、二個大隊の間がいる。それなのにやりとげることができない事を心配する事があるか。君達は全員が蜂起した人間だ。一人は敵十人に当ることができ、十人は百人に当ることができる。我々は現在この様に数百人の部隊であるが、何を恐れることがあろうか？ 挫折と失敗なくしては、成功もないであろう……⁽²⁾。賀龍の成功の例をあげて兵士達を励ますのは、いかにも毛沢東らしいやり方である。老百姓達にはこのような実例こそが、何よりも説得力を持つのである。毛沢東はこのような実例をあげつつ、兵士達に自分達の事業にも希望があることを説いた。この演説をした後に、毛沢東は兵士の中に入って個別に話し合いをしている。頼毅はその様子を「毛沢東同志は自ら中隊、小隊、班に行き思想工作をし、兵士に革命情勢と革命の前途について話した。幹部兵士に革命勝利の希望を持たせた」と回想している。

圧倒的軍事的劣勢という情況の中で、敗走を続ける軍隊にあつては、兵士の士気こそがこの軍隊の崩壊を救う唯一の妙策である。その他には兵器にも装備にも、何一つ依拠できるものはない。ただ兵士達の精神によって軍隊を再建する以外には道はない。そして兵士達の精神を支えるのは、革命への信念とその勝利に対する希望である。兵士達各

人がこの信念と希望を持ち続けることができさえすれば、現在の困難に耐えて戦い続けていく事ができる。毛沢東はそのように確信し、このような方法による軍隊再建の道を選択したのである。三湾改編とはこのような毛沢東の確信に基く、軍隊建設の第一歩であった。従って何よりもこの改革の目的は、兵士達がその日々の生活の中で、革命の偉大な意義と、それが持つ大きな希望を実感できるように、そのような軍隊を創りあげることになされていた。改編は主に三つの内容からなっているが、その底を貫徹しているのは、このような目的意識と精神である。

改編の第一の内容は軍隊の縮小である。一個師団の軍隊を一連隊(團)に再編し、その下に二個大隊(營)、七個中隊(連)を置き、別に将校隊と衛生隊を設けるという形に縮小したのである。この軍隊の縮小再編成は、減少した兵士の数に合わせた組織改革であった。この頃は相つぐ戦闘による戦死と士気低下による脱走によって、兵士の数は千人前後に減少していた。それにこの三湾村で毛沢東は新しい軍隊建設のための思い切った措置をとる。「自願」の原則を採用したのである。軍隊を離れたい者には旅費と証明書を渡して帰郷させ、軍隊に残りたい者だけを残したのである。この措置によってまた兵士の数は減る。だがこの自願の原則こそは、兵士の自覚に基く軍隊建設の第一歩であった。人数は減っても兵士の質は高まり、軍隊の戦闘力は却って強化される。軍隊は精鋭化されたのである。

この軍隊の精鋭化のためには、もう一つ条件を整備する必要があった。指揮官である。これまでの指揮官、師団長余酒度とは、毛沢東は長沙攻撃問題について意見が対立したし、その後もこの意見対立は尾を引いていた。余酒度は明かに中共中央の影を背負っていたし、それに同調する人間もいたのである。毛沢東は彼等を更迭する。師団長余酒度と第三連隊長蘇先俊を退け、連隊長に陳浩を任命するのである。この指揮官の交代について、毛沢東は兵士達の前で次のように語ったと陳樹草は回想している。「以前の指導は部隊をでたために指揮した。本当に無奈苦茶であった。現在はよくなった。我々は部隊を一連隊に再編することを決定した。最も有能で、最も経験のある陳浩同志が連隊長

となる。彼は必ず我々がたえず勝利するように指揮できる」毛沢東は余酒度等指揮官の無能ぶりしか話っていないが、しかし真の狙いはその政治的立場にあったのではないかと考えられる。事実指揮官として全く無能であったのかもしれない。しかし毛沢東にとって、それ以上に彼等が障害であったのは、彼等が中共中央の指導に忠実であった事だと思われる。全く新しい軍隊と革命運動の創造へと出発しようとしている毛沢東にとって、中共中央の影を常に背負って登場する指導者の存在は、障害以外の何物でもなかったのである。毛沢東の構想にとっては、自己の政治指導を軍隊に貫徹させることは、絶対的な必要条件であった。連隊長の陳浩への交替は、毛沢東にとっては必須の事であったのである。

改編の第二の内容は、党による軍の掌握である。これこそが兵士の精神、その人間的自覚の上に軍隊を建設していくという事業の要となるものであった。「毛沢東の軍隊」の生命である。それは党支部を中隊に作り、小隊、班には党小組を作り、中隊以上には党代表を設け大隊、中隊には党委員会を設け、部隊は毛沢東を書記とする中共前敵委員会が統一指導する⁽⁴⁾、という党組織である。この党組織によって、軍隊の上から下まで完全に党（毛沢東）の指導が貫徹する事が保証されたのである。そしてこの党組織は、兵士に対する思想工作を主な任務とする。こうして兵士達の自覚は常に高まるし、その事によって部隊の士気も旺盛なものとして維持されるのである。兵士達の人間的自覚の上に軍隊を建設していくという毛沢東の構想は、軍隊内に党組織を建設することで実体化されるとともに、この党組織こそが毛沢東構想の推進力として機能することになるのである。毛沢東の軍隊、毛沢東の新しい革命運動、このすべての出発点はこの党による軍の掌握という、この事実の中にあった。

改編の第三の内容は、部隊内の民主化である。民主化は政治的権利の保障と経済的平等という二つの内容を持つ。兵士は将校と同じ発言権を持つとともに、兵士と将校は生活面での平等の待遇を受けることになったのである。食事

係が毎月その経理内容を公表するというのは、待遇の民主化を保証するためであった。韓偉の回想は部隊の民主化について次のように語る。「毛沢東同志は将校が兵士を殴る罵るのを許さないこと、将校と兵士の待遇の平等、兵士の発言の自由を徹底した。併せて中隊、大隊、軍隊に各級の兵士委員会を組織した。その任務は部隊の管理に参加する事であり、政治工作と大衆工作、幹部の仕事ぶりへの監督を行った。昔は兵士は将校を怖れたが、兵士委員会ができてからは、幹部が間違いを犯せば、兵士は公開で幹部を批判することができるようになった」。

部隊内の民主化は革命の理想を現実化する一つの措置であった。兵士達は民主化がもたらした生活の現実によって、革命という事業の意味と理想を日々実感し理解することができたのである。そしてこのことは疑いもなく、兵士達の革命という事業への理解を深め、その人間的自覚を高め、従ってその志気を高揚させた。そしてこの兵士達の志気の高揚こそは、武器や装備に頼ることのできない軍隊にあつては、唯一の戦闘力強化への道であつた。と同時に軍隊を核とした革命運動にとつては、兵士一人一人の自覚と志気こそは、依拠すべき最大の支権でもあつた。兵士達の間としての行動こそは、人民の理解を獲得し、その革命運動を拡大し、強化していくための「武器」であつたからである。

(三)毛沢東の創造

ここに軍隊による革命運動という、全く新しい革命運動が誕生したのである。これこそは中国革命運動の新しい出発であつた。毛沢東の勝利は、ここで定礎された運動の遙かな、困難に満ちた展開の彼方に達成されたものである。その意味でこれは「勝利」への困難に満ちた出発であつた。この「出発」は、明らかに追いつめられた敗北の中で、生きる活路を求めて行われたものであつた。しかしそれは単なる生き残るために、その場の思いつきだけで行われた

ものでは決してなかった。そこには毛沢東の、革命運動に対する構想がある。これまでの不毛な革命運動の質的転換を意図した、毛沢東の強い意見と明確な構想を、その中に見ることができるのである。

毛沢東がこれまでのコミンテルン指導の革命運動とは異質の、全く新しい、中国の実情に即した革命運動の創造を意図していた事は次の諸点において認められる。まず第一に農民の軍隊による戦争、即ち農民戦争を革命運動そのものとした事である。これはこれまでのコミンテルン運動を、根本的に否定するものであった。コミンテルン運動は、労働者階級の階級闘争を中心とするものであり、その最高の形態が、労働者の武装蜂起であり、武装蜂起による国家権力の奪取であった。コミンテルンでも農民運動や農民の武装をとりあげないことはない。だがそれ等は都市労働者の武装蜂起の権力奪取を支援し、それと結合するものとしてであった。決して農民の武装闘争を革命運動の中心的支柱として据えることはなかった。毛沢東はこのコミンテルンの革命運動の形態を、百八〇度転回させたのである。しかしその事は農民社会であり、農民が人口の圧倒的多数を占める中国社会の実情に、革命運動を適合させることであった。失敗につぐ失敗で、危機に瀕していた中国の革命運動に、新しい任務を与え、それを救済する事であったのである。

農民戦争を革命運動の形態とする事で、想定する革命の形態も、大きく転換された。コミンテルンの想定する革命は、都市労働者の一斉蜂起による権力奪取であり、それは一回の戦闘に革命運動の運命を賭けるという性質のものであった。この一回の戦闘を勝利するために、革命運動の日常的努力は集中されたのであった。だが毛沢東の想定する革命とは、このコミンテルンの一回性の革命とは、全く異質であった。後に「農村を以て都市を包囲する」と定式化されるようになるように、彼は小さな勝利の積重ね、自己の「根拠地」の拡大の彼方に、革命の勝利を展望するのである。ここでは革命運動は、一回の戦闘にすべてを賭けるといふ賭博性の強いものから、日常的な小さな勝利の積重ね

ねという、非常に地道で着実なものになる。戦争は日常化するが、運動の性格は非常に着実なものとなるのである。中国のように広大で、しかも交通通信手段の未発達な農業国では、革命運動にはこの息の長さに着実こそが必要とされたであろう。毛沢東の創造は、この意味でも中国社会に適合的であったのである。

この革命の形態の大転換は、革命運動の日常的任務、その組織活動の性格をも、大きく変える事であった。コミンテルン運動では、「鉄の規律」こそが、その組織の至上の原則であった。そしてこの「鉄の規律」を持った組織の拡大こそが、革命運動の主要な課題であった。組織内部では、上部への絶対服従が義務であり、個人の自由な思考や発言は、厳しくいじめられた。その組織には暗い、非人間的な性格と秘密の陰謀団体のイメージがつきまとった。これに対して毛沢東は、組織を開放し、そこに民主主義的要因を導入した。組織成員の一人一人が自覚を高め、真の「革命人」となるためには、組織内部における民主主義は不可欠のものであったからである。この措置は、革命運動に「人間」の香りを導入することであった。革命運動の日常の中に、人間解放というその最終的目標を現実化していくものであった。中国革命がスノウやスメドレーという、欧米の知識人達を魅惑し、世界に大きな衝撃を与えた理由は、まさに革命運動の日常の中に、人間的解放を現実化させたという、毛沢東の運動のこの獨創性にあった。

毛沢東がコミンテルン運動のコペルニクスの転回とでも言うべき、この大転換を為しとげたのは、一つには情況が彼に味方をしたという事がある。敗北につぐ敗北で、彼の率いる蜂起軍は、党中央との連絡がとだえ、完全に糸のきれた凧のような状態になっていたのである。党中央の統制から離れた事が、毛沢東に独自の大胆な構想を実行する機会を与えた。その意味で敗走という情況は、彼に味方したのである。しかしその事は決定的な要因ではなかった。われわれは、そこに毛沢東という一人の人間の存在、そして彼の大胆な決断と独自の構想力を見なければならぬであろう。

当時の革命運動ではコミンテルンとその指導者スターリンの権威は圧倒的なものがあつた。この権威に立向い、それに反逆することは並大抵の事ではなかつた。毛沢東はその事を、行動において実行したのである。この毛沢東の行動を支えるものとして、われわれは二つのものに注目せねばならないであろう。一つは彼の強烈な自我意識、圧倒的な自己主張である。若年の毛沢東はその思考のはてに、「精神の個人主義」に到達し、天地の間で頼るのは自分のみと主張したのであつた。そしてこの青年毛沢東は雄大な長編詞「長沙」において、「天」と対峙し、自己を主張したのであつた。この強烈な自己意識こそは、彼の行動の原動力である。彼は当時の最高の権威コミンテルンに対して、やはり自己を対置し、自己主張を貫徹しているのである。そしてこの強烈な自己意識を支えたのは、彼の類い稀な、徹底した現実的思考であつた。「今何を為すべきか」、この間に対する答えにおいて、毛沢東は自らの「正しさ」を確信したのである。コミンテルン——党中央の指令よりも、はるかに自らの回答の方が「正しい」と彼は確信したのである。蜂起軍の行動に対する指令において、毛沢東はコミンテルンの政策の観念性と独善性をついに見破つた、と言つてもよいかもしれぬ。彼はこの問題を契機に、コミンテルンの指令を離れて、自立した運動への出発を決定したと考えられるのである。

一〇月六日、井岡山の割拠する工匪集団の指導者の一人、袁文才と毛沢東は会見する。会見の結果合意に達し、そこで毛沢東の率いる労農革命軍は、袁文才、王佐の軍隊の歓迎を受けながら、井岡山へ登ることになるのである。それは中国革命運動の新しい出発であつた。毛沢東はこうして新しい出発点に立つたのである。

結 語 毛沢東の創造力と中国伝統の思想

毛沢東自身何度か「逼山梁山」（追いつめられて梁山へ逃げこむ）と形容した事があるが、彼の軍隊の井岡山への進軍は、まさにこのようなものであった。決して最初から予定されていた行動ではなかった。毛沢東は自らの信ずる農民革命を追求しながら、失敗と敗北を重ねつつ、命からがらここに到達したのであった。この行動は、疑いもなく失敗と敗北の結果としてあるものであった。

この井岡山に登るといふ事実は、まず何よりも毛沢東の農民革命論の破綻と失敗の結果であった。毛沢東は早くから国民の圧倒的多数を占める農民に着目し、「農民問題は国民革命の中心問題である」という信念を形成するようになっていたが、湖南農民運動の高揚は、この毛沢東に農民運動の中に、中国を変革する革命的力量が存在することを確信させたのであった。毛沢東は湖南農民運動視察の旅で、農民運動の中に中国社会を根源的に変革する力量が存在するだけではなく、自覚して立上った農民の中には、次なる社会の秩序を形成する能力も潜んでいることを確信したのであった。だがこの毛沢東の農民革命論は、クロポトキンの強い影響を受けたものであり、革命の香り高いロマンチズムにはあふれていたが、肝腎の権力論が欠落していた。この毛沢東の農民革命論の盲点を痛撃したのが、外ならぬ蒋介石と国民党系軍閥であった。

国家権力が常備軍を先頭に立てて農民運動の上に襲いかかってきたのである。毛沢東の農民革命論には、地方の地主権力との武装闘争は想定されていたが、国家権力との正面对決という事態は想定されていなかった。当然の事として農民運動による国家権力の奪取という問題は欠落していた。この盲点を国民党軍の方が先手をうって痛撃してきたのである。この国民党の相継ぐ軍事クーデターで、一時は農村に支配権を確立したかに見えた農民協会は、壊滅的な

打撃を受ける。活動家達は逮捕虐殺され、協会員も激滅する。毛沢東のこの余りにも悲痛な経験の総括こそは、あの有名な「政権は鉄砲から生れる」という簡潔な名言であった。毛沢東の農民革命論は、農民戦争論へと昇華されたのである。そしてこの毛沢東の新しい農民革命論の実践こそは、秋收蜂起であった。しかし、この戦いは敗北につぐ敗北であった。彼我の軍事力の差は如何ともしがたく、毛沢東の軍隊は追いつめられて井岡山に登ることになったのである。この意味で井岡山への進軍は、毛沢東の農民革命論の破綻と失敗の結果としてあったのである。

またもう一つ、それは毛沢東と党中央の決裂の結果でもあった。国民党軍による白色テロに憤激した毛沢東は、コミンテルン及び党中央の指導部と、その憤激の激情と過激な暴動路線を共有していた。彼等は共同して蜂起計画を策定し、実行に踏み出したのであった。しかし現地湖南に行き、現地の党组织と農民運動の実情を知った毛沢東は、そのすぐれた現実感覚に導かれ、党中央とは異った方向へと歩み出す。心情的興奮とイデオロギイ的現実認識によって策定された計画の観念性に気づき、毛沢東はもつと実行可能な計画に縮小し、実現可能な方策を採るよう主張したのである。しかし党中央は毛沢東及び湖南省委の提案を全く受けつけず、計画通りの実行を強引に下達してくる。だがその命令は圧倒的に軍事的劣勢にある蜂起軍に玉砕を命じるようなものであった。毛沢東はこの中央の命令を無視する。彼は自己の判断に基いて自分達が生き残る道を選択する。この行動が長沙攻撃の放棄であり、農村への撤退、そして井岡山への進撃であった。従つてこの井岡山へ登るといふ行動は、毛沢東にとっては中共中央との決裂の結果でもあった。そしてそれは同時に彼自身の革命運動創造への開始でもあったのである。

井岡山への進軍という事実は、このような意味で、それは何よりも失敗と敗北の結果としてあるものであった。決して「偉大な壮挙」でもなければ、希望にあふれた出発でもなかった。しかしこの失敗と敗北の結果でしかない逃避行を、新しい創造と勝利の基点へと転化するという所に毛沢東という人物の驚くべき才能があった。彼はそれを中国

革命という二〇世紀の壮挙の出発点へと、見事に転化したのである。なぜ毛沢東はそのような事ができたのであろうか。この謎を解くために、われわれがここで注目したいのは、これまでの彼の行動の軌跡の中に貫流している思考の一つの特質である。

ここでわれわれがこの間の毛沢東の行動の軌跡に一貫している思考の特質と呼んだものは、彼の自分の思考を、自己の実践という問題に集中し、それ以上の世界には思考を拡散させないという態度の事である。例えば国共合作政策に対する毛沢東の態度である。国共合作政策には、締結された当初から中共党内には批判と不満が渦巻いていた。しかし毛沢東はそのような事は、この時代全く口にしていない。彼はこの政策の中に居て、そこで自己の政治目的を積極的に追求していく。毛沢東が農民運動の本格的組織に乗り出したのも、国共合作という政策の枠内においてであった。毛沢東にとっては、国共合作政策の政治的性格がどのような性質のものであるかというような問題よりも、それが自己の政治目的のために有用であるかどうか、真に問題であったのである。彼は自己の政治目的の実現のために役立つ限り、その中に入り、積極的に活動する。彼にとつての問題は政治路線の質よりは、実践への有用性にあった。

国共合作政策に見られる毛沢東の思考の特質は、彼のコミンテルンに対する態度の中にも認められる。コミンテルンの指導の、中国の現実から遊離した観念的性格や、その強引な権威主義的指導に対する批判や反撥が中共党内に強かった事は、張国燾の回想などを読めばよく理解できる。しかし毛沢東はこのコミンテルンについても、全くその批判を口にしていない。特に国共合作破綻後の、コミンテルンの方針転換は、コミンテルン批判の絶好の機会であったが、毛沢東はここでは最も積極的なコミンテルン路線擁護者として登場している。コミンテルンの方針転換は、自身の農民革命論実践のために非常に歓迎すべきものであったからである。コミンテルン路線の忠実な実践者である、当時の中共中央に対する態度も同様であった。彼等の主観的熱狂に彩られた左傾路線を、毛沢東はこの立場から積極

的に支持したのであった。毛沢東が彼等と対立するようになったのは、秋収蜂起という実践の中においてであった。毛沢東は蜂起の実行という現実問題において、彼等指導部の空論を拒否したのである。毛沢東がコミンテルン運動と中共中央と対立し、決別したのは理論的問題からではなく、現実の「実践」に対する態度と政策の相違からであった。このように支持するにせよ、反対するにせよ、毛沢東の態度の根底には自己の実践という問題がある。実践に有用であると判断する限り、彼はそれを支持し、その枠内において行動する。コミンテルン運動そのものに対してもそうであったし、国共合作政策に対しても同様であった。

なぜ毛沢東はそのような行動をとったのであろうか。そこでわれわれが思い起こすのは、第四師範に入学した直後、彼が受講した楊昌済の講義の内容である。その記録は「講堂録」として残されているが、その第一時間は楊昌済の倫理学の講義である。ここでは楊昌済は曾國藩日記の一節「士が世風を転移せんとするには、両義を重んずべきである。曰く厚、曰く実。厚とは人を嫌わない事であり、実とは大口をたたかず、虚名を好まず、架空の事を行わず、高すぎる理を語らない事である」という言葉を解釈している。これまで追跡してきた毛沢東の行動の軌跡の中に一貫する態度として、われわれが確認できるのは、外ならぬこの曾國藩の言葉ではないであらうか。自己の思考を自己の行動という一点に引きつけて、それ以上の所に拡散していくことを厳しく諫めた、この言葉の指し示す人間的態度そのものではないであらうか。コミンテルン運動とその国共合作政策への批判や客観的論評を一切口にせず、ただひたすらその運動と政策の枠内で、農民運動の組織化を追求していく毛沢東の姿にあるのは、曾國藩の言う「実」という人間的態度であろう。毛沢東にとっては政策論争に没頭するというような事は「架空の事を行」うという事であり、コミンテルンの運動を批判するというような事は、「高すぎる理を語る」ことに外ならなかったのである。なぜならばコミンテルン運動も、その国共合作政策も、ともに自分がその革命という目的を追求するために、身を置いた実践の「場」

であつたからである。「場」そのものの性格を抽象的に議論したり、批判したりする事は、直接的に自己の実行に結びつかない。というよりは真剣な行動にとつては妨げとなる。「場」に入つたからには、それを条件として受け入れ、その中で真剣に、全力をつくして自己の為すべき事を実行することこそが、すぐれた成果を生みだす。人間の思考とは、そのように自分自身の身に引きつけ、実行ということに則していなければならぬのである。「場」そのものの性格を云々し始めた時、この堅固な実行の人間としての精神と態度は、崩壊の危機に見舞われる。曾國藩の言葉は、その事を厳しく戒めていたのである。そして毛沢東はこの言葉に限りなく忠実であつた。

毛沢東の驚くべき創造力と行動力の秘密も、この言葉の指し示す人間的態度の中にあつた。この言葉はどのような状況の中においてであれ、自己の抱く思想を実現できる道をさぐり出し、それを実行していく事にこそ、人間の責務があることを教えている。この思想は中国伝統哲学の立場でもあつた。そこでは実行のともなわない思想は「空言」であつた。毛沢東の中に生きて働き続けているこの思想、曾國藩の言葉としてある中国伝統思想の立場こそは、毛沢東の創造力の源泉であつた。毛沢東は失敗と敗北の総体でしかない井岡山への逃避行の中で、また新しい実践の道を探求する。革命という理想を「実行」する道を必死で探求する。この態度こそが窮極の敗北を、創造と勝利への出発点へと逆転したのである。このような意味で、われわれは毛沢東の驚くべき創造力と行動力の源泉となつてゐるものは、曾國藩の言葉に集約されている中国伝統哲学の立場だと考えるのである。

毛沢東のこのような自己の実行に則しきつた、低い姿勢が彼自身の破滅を防ぎ、コミンテルン運動の中で、新しい運動の創造を可能にしたものであつた。毛沢東は実行から離れた「高い」理論的問題についての発言をいましてゐる。この態度は、コミンテルンや党中央との直接的対決を回避する事にも通じ、そこからの直接的弾圧を避けることができたのである。それが毛沢東を成功させる一つの原因となつてゐる。しかしこの毛沢東の実行に則した思考が、

彼の運動の一つの限界となつてゐることも、見逃してはならないであらう。彼の運動は、コミンテルンのそれとは異質な、新しい要因を持ったものではありながら、やはり基本的には、コミンテルン運動の性格を継承したものであつたからである。この問題については、今後考察を続けていきたいと考えている。

註

題字

毛沢東(四)としたが本来は(六)とすべきものである。(三)を發表しないことは前号に書いたが——「農民革命論」の形成と展開——と題する(五)も紙数の関係で、後日まとめて發表する時に、發表したいと考えている。

問題の所在

- (1) 劉盖涛「毛沢東同志湘贛辺秋收起義」
党史研究一九八一年第五期
- (2) 賀春禧「毛沢東在領導秋收起義中对党的思想理論貢獻」
党史研究一九八二年第六号
ここで出されている六つの論点は次のようなものである。
 - (1) 共産党の旗をかかげた事、(2) 徹底的に封建制度を廃絶する土地革命の思想を提起したこと、(3) 民衆の武装闘争と軍事闘争の結合を提起したこと、(4) 起義の範圍を縮小し、長沙攻撃を中止したこと、(5) 農村革命根拠地の思想を提起したこと、(6) 人民の軍隊の創設。

第一節 コミンテルン運動の新展開

(一) コミンテルン運動の体質と左傾路線

- (1) 陳独秀「告全党員書」 陳独秀著作選 第三卷 八五五—一〇五五頁 上海人民出版社（一九九三年）
 - (2) 共産国際執行委員会關於中国革命当前形勢的決議
共産国際有關於中国革命的文献資料（一九一九—一九二八）
中国社会科学出版社（一九八一年）三三九頁
 - (3) スチュアート、シユラム「毛沢東」紀伊国屋書店（一九六七年）石川忠雄等訳 八五頁より重引。
 - (4) 張国燾「我的回憶」第二冊 明報月刊出版社（一九七三年）六五三頁
- (二) 左傾路線の心情と論理
- (1) 共産国際代表羅明納茲的報告
中国共産党歴史資料叢書「八七会議」中央党史資料出版社（一九八六年）四九—五頁
 - (2) 前同 〃 五四頁
 - (3) 蔡和森 關於共産国際代表報告的發言 同前 六一頁
 - (4) 張国燾「我的回憶」第二卷 六七—九頁
 - (5) 李立三「党史報告」前同 一七七頁
 - (6) 革命歴史資料叢刊「湖贛辺秋収起義研究」
（以下「研究」と略称する）江西人民出版社（一九八七年）六一—七頁
 - (7) 李維漢「關於八七會議的一些回憶」（1）に同じ 一九三頁
 - (8) 前同 〃
最近農民闘争的議決策（1）に同じ 三八頁
 - (9) 告全党員書 〃 一〇—一一頁
 - (10) 前同 〃 一二頁
 - (11) 中国共産党的政治任務与策略的決議
中共中央文件選集（中共中央党校出版社）三卷 二三四頁（以下文件と略称）
 - (12) 李立三報告
一八一革命之経過与教訓 前同 四〇八頁
 - (14) 中共湖北委員会書記「中央常務委員会での政治報告」

中国共産党史資料集3 頸草書房（一九七一年）三〇三―三四頁

(15) 周恩来「關於党的“六大”的研究（節録）」(1)に同じ 一六三頁

(16) 張国燾報告（一九二七年一〇月九日）(12)に同じ 四二七頁

(三) 左傾路線と毛沢東

(1) 告全党黨員書 前掲「八七會議」三頁

(2) 毛沢東關於共産国際代表報告的發言 前同 五七―八頁

(3) 共産国際代表羅明納茲關於農民鬭爭決議案的發言 〃 七四頁

(4) 毛沢東關於農民鬭爭決議案的發言 前同 七三頁

(5) 前掲李維漢回憶 一九〇頁

(6) 胡長水、李瑗「横空出世」中国革命出版社（一九九三年）三六二頁

(7) 前掲「研究」より重引 五五頁

第二節 秋収蜂起

(一) 中共中央と毛沢東

(1) 前掲「文件選集」二二五―六頁

(2) 前同 〃 二一五―二二二頁

(3) 前掲「横空出世」三六〇頁以下より重引

(4) 前同 三六二頁

(5) 中央致湖南省委信 (1)に同じ 三〇七―八頁

(6) エドガー・スノウ「中国の赤い星」筑摩書房（一九六四年）一一二頁

(7) 前掲「横空出世」三六三―五頁

(8) 在中共湖南省委員会第一次會議上的意見

毛沢東集補卷2 蒼々社（一九八四年）二九九頁

(9) 前同 〃 二九九―三〇〇頁

(10) (6)に同じ

(11) 前掲「研究」七六頁より重引

(12) 湖南致中央函 前掲「文件」3 三五四頁

(13) 前掲「毛沢東」九五頁

(14) 中央復湖南省委函 前掲「文件」3 三五〇—三五三頁

(15) 湖南省委来信 前掲毛沢東集2 一三一—四頁

(16) 両湖暴動計画決議案 前掲「文件」3 三六三—八頁

(17) 中共中央文献研究室編「毛沢東年譜」上巻 中央文献出版社 二一六頁より重引

(二) 蜂起の決行と亀裂の拡大

(1) 以下の記述は基本的に前掲「毛沢東年譜」上巻 二一三頁

以下に依拠する。特に必要と認めたものだけを注記することにする。

(2) エドガー・スノウ

(3) 宇佐見誠次郎訳 新版中国の赤い星 箱摩書房(一九六四年) 一二二頁—三頁

(4) 辛子陵「風革正茂」利文出版社(一九九三年) 三二頁

(5) 前掲「研究」二二九—三〇頁より重引

(6) 政治紀律決議案 前掲「文件」3 四八一—四頁

第三節 新しい運動の創造への出発

(一) 文家市での毛沢東の講話

(1) 前掲「研究」に多くの人の人の回想を集めている。しかしこれらの回想は人名は書いてあるが、出典が明記されていないのが大部分である。以下の引用はこの「研究」に依拠するか、やむをえぬので人名のみの表記にとどめる。

前掲「研究」二二三—二三七頁

(2) 前掲 〃 二四五頁

(二) 三湾改編

(1) この記述も前掲の引用文に依拠する。前と同様出典が明記されていないので、人名のみを書いておく。

- (2) 前同 二六五頁
- (3) 〃 〃
- (4) 前掲「年譜」二二二頁
- (三) 毛沢東の創造
- (1) 関於若干歴史問題決議 毛沢東選集第三卷 九五九頁
- (2) 講堂録 前出「文稿」五六一頁